

# 金沢文庫本『正法眼藏』の訳注研究(六)

外国語禪籍研究班

小川 池上 光洋  
林 隆 小早川 浩太  
鳴 宇

## 目次

凡例

- |      |       |             |      |       |        |
|------|-------|-------------|------|-------|--------|
| (六八) | (168) | 大瀉妙淨明心      | (六九) | (169) | 迦葉倒却刹竿 |
| (七〇) | (170) | 外道不問有無      | (七一) | (171) | 法眼不知親切 |
| (七二) | (172) | 洞山仏麻三斤      | (七三) | (173) | 憲宗迎仏舍利 |
| (七四) | (174) | 世尊七仏儀式      | (七五) | (175) | 漸源在紙帳内 |
| (※以下 | (七六)  | 「八二」前半まで欠丁) |      |       |        |

## 凡例

一、本稿は金沢文庫本『正法眼蔵中』六八〇七五則の原文・訓読・現代語訳・出典・注釈である。真字『正法眼蔵』(『正法眼蔵三百則』または単に『三百則』とも呼称)には、他に真法寺旧蔵本(黄泉本または伊勢氏旧蔵本とも、現在河村孝道氏所蔵)・永昌院本・成高寺本・松源院本・大安寺本(下巻のみの端本)・拈評三百則本・丈六寺本(上巻のみの端本/拈評本の稿本)の七種の異本が現存するが、本稿は和語化への生々しい痕跡を有する金沢文庫本の忠実な訓読と現代語訳を目的とするため、細かな異本校合は行わなかった。

一、底本には『永平正法眼蔵蒐書大成 一』(大修館書店一九七八年)所収の金沢文庫本を用いた。金沢文庫本は、句読訓点や唐音読みを残す国語史的にも貴重な資料であるが、底本は『蒐書大成』(影印)や『金沢文庫資料全書』第一巻・禅籍篇(翻刻)(神奈川県立金沢文庫一九七四年)等によって比較的容易に参照できるため、原文は漢字のみとし、文字も通用の新字体に統一した。また、読解の便宜のため、底本に朱筆で打たれた読点を極力尊重しつつ、あらたに標点を施した。

一、本稿では検索の便を考慮して、各則のはじめに金沢文庫本における通し番号、三百則全体の通し番号、および表題を太字で付した。金沢文庫本の通し番号は、底本中に十則ごとに書かれる通し番号を元にし、「一」内に漢数字で表記した。但し、脱丁部分にあたる五七則から六七則、および七六則から八一則は欠番扱いにし、八二則は後半部分が存在するので則数に入れた。三百則全体の通し番号は、石井修道校注『道元禅師全集』五(春秋社一九八九年)所載の通し番号を付し、「一」内に算用数字で表記した。表題も同書の目次(凡例所載)を採用した。

一、訓読は、底本の句読訓点を忠実に再現するよう努めた。底本には漢字の左右に振り仮名が振られ、一文に訓読みと音読みを併記する例が存在するが、本稿ではまず右側の振り仮名を基準として訓読文を作成し、左のものは「( )」に入れてその直後に、右傍訓右のものは(右・)、頭注は(頭・)と表記した。また、底本の振り仮名は全て片仮名で濁音表記は一切無く、促音表記等も不統一であるが、読み易さを考慮して訓読には濁点と必要最小限の振り仮名を追加した。但し、底本の振り仮名と混同しないため、本稿で新たに付加したものは平仮名で表記した。また、古用仮名は一律に現行の片仮名に改めた。不読文字は「( )」に入れて表記した。

一、現代語訳は、訓読文をもとに訳出したものである。近年、漢語史研究の進展により、従来の禅籍の読み方が再検討されてきているが、本稿では、道元が漢語をどのように理解し、それを和語でどう表現したのか、その過程を明かすことを目的としているため、現在の語学的見地から見てたとえ不適切な読み方であったとしても、敢えて訓読文に忠実な翻訳を試みた。原語の意味と訓読の解釈に相違があると考えた場合は、注にその旨を記した。

一、出典は道元が古則をどう理解し、どう変更を加えたかを明らかにするために付した。但し、出典研究自体は既に行われているため、本稿では細かな考証は行わず、鏡島元隆監修『道元引用語録の研究』（春秋社一九九五年）の成果に従い、第一出典を（A）、第二出典を（B）として表示した。

一、注は本則を読むために必要な情報を載せ、道元禅の思想的展開の上で重要な事項がある場合には、最後に補注を付けた。また、引証に用いた文は、注釈者の解釈を明らかにするため全て書き下しにした。但し、金沢文庫本や祖山本『永平広録』等の古い訓読を残す文を引く場合は、その訓読に従った。その場合は、書き下し文を片仮名で表記して区別した。尚、注番号は原文中に付した。本稿の目的からすると訓読文中に付すべきであるが、訓読文には多数の振り仮名などが付されているため、いたずらな混乱を避ける処置である。

一、本稿で引用する主な文献は、以下のものを用いた。出典や注においてそれらのものを使用した場合は、書名・巻数・頁数のみを記した。但し、灯史類を使用した場合は、巻数の次に祖師名を明記した。引用が数頁にわたる場合は、その先頭の頁数を表記した

真字『正法眼蔵』（石井修道校注『道元禅師全集』五・春秋社一九八九年）は、則数のみを表記し、頁数等は省略した。

仮字『正法眼蔵』（水野弥穗子校注・岩波文庫一九九〇年）は、『正法眼蔵』「観音」巻と表記し、（一）内に巻数と頁数を表記した。尚、岩波文庫本に不載の巻は河村孝道校注『道元禅師全集』二（春秋社一九九三年）を用い、（全集二・〇〇頁）と表記した。

『永平広録』（渡部・大谷監修『永平広録考注集成・祖山本』一穂社一九九八年）

『正法眼蔵随聞記』（東隆真編『五写本影印・正法眼蔵随聞記』圭文社一九八〇年／水野弥穗子訳『正法眼蔵随聞記』筑摩書房一九九二年）  
その他の道元の著作は春秋社の『道元禅師全集』により、（全集〇・〇〇頁）と表記した。

金沢文庫本『正法眼蔵』の訳注研究(六)(小川 池上 林 小早川)

『大正新修大蔵経』は大正〇〇・〇〇〇〇a、『卅統蔵経』は統蔵〇〇・〇〇〇〇dと表記した。

『祖堂集』(基本典籍叢刊・禅文化研究所一九九四年)

『景德伝灯録』(基本典籍叢刊・禅文化研究所一九九〇年)

『宗門統要集』(柳田・椎名編・禅学典籍叢刊一・臨川書店一九九九年)

『天聖広灯録』(柳田聖山編・禅学叢書五・中文出版社一九七五年)

『聯灯会要』(統蔵一三六)

『嘉泰普燈録』(統蔵一三七)

『建中靖国統灯録』(統蔵一三六)

『臨濟録』(入矢義高訳注・岩波文庫一九八九年)

『趙州録』(秋月龍珉訳注・禅の語録一一・筑摩書房一九七二年)

『洞山録』(柳田聖山編・禅学叢書三『四家語録・五家語録』中文出版社一九八三年)

『曹山録』(柳田聖山編・禅学叢書三『四家語録・五家語録』中文出版社一九八三年)

『仰山録』(柳田聖山編・禅学叢書三『四家語録・五家語録』中文出版社一九八三年)

『宏智録』(石井編・禅籍善本古注集成・名著普及会一九八四年)

『明覚録』(柳田・椎名編・禅学典籍叢刊二・臨川書店一九九九年)

『雪竇頌古』(入矢他訳注・禅の語録一五・筑摩書房一九八一年)

『圓悟録』(大正四七)

『碧巖録』(入矢・溝口他訳注・岩波文庫一九九二年)

『大慧録』(大正四七)

大慧『正法眼蔵』(柳田・椎名編・禅学典籍叢刊四・二〇〇〇年)

『從容録』(基本典籍叢刊・禅文化研究所一九九四年)

『如浄録』(大正四八)

『禪門諸祖偈頌』（統藏一一六）

『禪門拈頌集』（柳田・椎名編・禪學典籍叢刊七・臨川書店一九九九年）

一、各則の担当者名は最後に記した。

一、本稿は駒澤大学禅研究所外国語禅籍研究班の活動報告として発表するものである。

## 訳注

〔六八〕（168）大瀉妙淨明心

大瀉問<sup>①</sup>仰山<sup>②</sup>：「妙淨明心、汝作麼生会？」仰云：「山河大地、日月星辰。」師云：「汝祇得其事。」仰云：「和尚適来、問什麼？」師云：「妙淨明心。」仰云：「喚作事得麼？」師云：「如是、如是。」

〔書き下し〕

大瀉、仰山ニ問フ、「妙淨明心、汝作麼生会。」仰云く、「山河大地、日月星辰。」師云く、「汝祇其ノ事ヲ得タリ。」仰云く、「和尚ハ適来、問什麼。」師云く、「妙淨明心。」仰云く、「喚テ事ト作センコト得テン麼。」師云く、「如是、如是。」

〔現代語訳〕

大瀉が仰山に問うた。「妙淨明心」、それをお前はどうか会得するか？」仰山、「山河大地、日月星辰です。」大瀉、「お前はただ『事』をしか得ておらぬ。」仰山、「和尚さまは先ほど何を問われました？」大瀉、「妙淨明心だ。」仰山、「それを『事』と呼んで宜しいのですか？」大瀉、「いや、いかにも、いかにも。」

〔出典〕

（A）『宗門統要集』卷四（八六頁b）

（B）『聯灯会要』卷七（統藏一三六・二七二頁c）

『大慧録』卷二一（九〇一頁a）

〔注〕

①大瀉ニ瀉山ニ靈祐。三、一〇、一五、一八、三〇、三四、四二則に既出。

②仰山ニ仰山慧寂。瀉山と同じ則ならびに三九則に既出。

③妙淨明心ニ靈妙にして曇り無き、鏡のような心。平等一如の「理」の喩え。『大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞嚴經』卷一、「阿難、若し諸の世界の、一切所有、其の中の乃至草葉縷結までも、其の根元を詰めれば、咸く体性有り。縱令い虚空なるも亦た名貌有り。何ぞ況んや清淨妙淨明の心、一切心に性たりて而も自ら体無からんや」(大正一九・一〇九頁a)。長水子璿

『首楞嚴義疏注經』卷一では「何ぞ況んや…」以下の句に次のように注す。「清淨」は異、妄、染と揀つ。妙淨明心は即ち三德具足し、靈鑑無味なり」(大正三九・八三九頁b)。この他、同注に次のような記述がある。卷四、「一真如の心、是れ仏の常説なり。或いは法界と名づけ、或いは実相と名づけ、或いは如来藏性といい、或いは妙淨明心という。一經の内にすら尚お

多名有り、況んや諸經をや。名に異ありと雖ども一体に別無し、皆な法界一相、本来平等を顯すなり」(大正三九・八七四頁b)。

④山河大地、日月星辰ニあらゆる個別の事物・事象。しかし、それと別に一心が存在するわけではないという含み。前出『首楞嚴經』卷二、「知らず、色身の外、山河・虚空・大地に洎ぶまで、咸く是れ妙明真心中の物なるを」(大正一九・一一〇頁c)。

『宛陵錄』、「山河大地、日月星辰、総べて汝が心を出でず。三千世界、都来て是れ汝が箇の自己なり、何処にか許多般有らん、心外に法無し。満目青山、虚空世界、皎皎地に絲髮許りも汝が与に見解を作す無し。所以に一切の声色は是れ仏の慧目なり」

(禪の語録八・二一八頁)。

⑤汝祇得其事ニお前はただ「事」を得ただけだ。「理」を得てはいない。

⑥和尚適来問什麼ニ「適来」は今しがた、先ほど。一二八則注⑤参照。底本のようにその下で断句する必要はない。

⑦喚作事得麼ニ「事」と呼ぶことが許されるのか。「…得麼？」はそのようなことで良いのかという反駁。一三三則、「僧問フ、如何是レ声不是声。仁云く、喚デ色ト作ルコト得テン麼。」私は先ほどの「山河大地…」の一句によつて、「事」ではなく、ま

さに「理」をこそお答えしたのです。「事」の差別相を捨象して平等一如の「理」に帰するのではなく、「事」(山河大地…)を示すことがそのまま「理」を示すことなのだというところ。『圓悟錄』卷三、「解夏上堂に云く、妙淨明心、本と延促無し。金

剛正眼、豈に開遮有らんや。絲毫も移らず、古今に独り露わる。理は事に随いて変じ、事は理を逐いて融ず。所作の心に随い、

所知の量に應ずれば、便ち春夏秋冬、生住異滅有り。無住の本従り一切法を立て、無功用を用いて、一切事を成ず。且らく隨縁不變の一句、作塵生か道わん。秋風、八極に吹き、木落ちて千山露わる。下座（大正四七・七二七頁）。「宏智録」卷五・小參二〇、「一切の諸相は即ち是れ自心なり。所以に道く、万法は是れ心光なり。諸縁は唯だ性のみ曉ると。若し能く一切処、一切時に在りて、諸縁に籠絡せられずんば、是れ大智慧人なり。塵を破りて経卷を出だし、量は三千界に等し」とは、只だ是れ諸人の妙淨明心なり。一切塵、一切刹に在りて、法界と等しく、清淨なること満月の如く、妙明にして常に照燭し、諸縁中において、一頭地を出だす（二七〇頁）。

### 《補注》

『正法眼蔵』「身心学道」

しばらく山河大地日月星辰、これ心なり。（一・一二九頁）

『正法眼蔵』「即心是仏」卷

古徳云く、「作塵生是妙淨明心。山河大地、日月星辰。」

あきらかにしりぬ、心とは山河大地なり、日月星辰なり。しかあれども、この道取するところ、すすめば不足あり、しりぞくればあまれり。山河大地心は山河大地のみなり。さらに波浪なし、風煙なし。日月星辰心は日月星辰のみなり。さらにきりなし、かすみなし。生死去来心は生死去来のみなり。さらに迷なし、悟なし。牆壁瓦礫心は牆壁瓦礫のみなり。さらに泥なし、水なし。四大五蘊心は四大五蘊のみなり。さらに馬なし、猿なし。椅子仏子心は椅子仏子のみなり。さらに竹なし、木なし。かくのごとくなるがゆゑに、即心是仏、不染汚即心是仏なり。諸仏、不染汚諸仏なり。（一・一四八頁）

『正法眼蔵隨聞記』卷二

又云く、今ノ斬猫ハ是れ即ち仏法ノ大用、或いハ一転語ナリ。若し一転語ニ非ズハ、山河大地・妙淨明心トモ云ふベカラズ。又即心是仏トモ云ふベカラズ。即ち此の一転語の言下ニテ、猫兒が体仏身ト見、又此の語ヲ聞いテ学人モ頓ニ悟入スベシ。（五四頁a／七六頁）

### 〔六九〕（169）迦葉倒却刹竿

二祖阿難尊者、問迦葉尊者云：「師兄伝仏金欄袈裟外、別伝箇什麼？」迦葉召云：「阿難！」阿難応諾。迦葉云：「倒却門前

刹竿著。」（阿難大悟。）

（書き下し）

二祖阿難尊者（二祖阿難尊者<sup>シスウラナムスミジャ</sup>）、迦葉尊者二問テ云く、「師兄、仏ノ金欄袈裟ヲ伝フル外、別ニ（箇）<sup>ナニ</sup>什麼ヲカ伝フル。」迦葉召シテ云く、「阿難。」阿難応諾フ。迦葉云く、「門前ノ刹竿ヲ倒却スベシ（著）。」（石・阿難大悟ス。イ本）

（現代語訳）

二祖阿難尊者が、迦葉尊者に尋ねた、「師兄は釈尊の金欄の袈裟を授けられたほかに、さらに何を伝授されたのですか。」迦葉は呼ぶ、「阿難！」阿難、「ハイ。」迦葉、「門前の刹竿を倒しておけ。」（阿難はそこで大悟した。）

（出典）

（A）『宗門統要集』巻一（一七頁a）

（B）『聯灯会要』巻一（統藏一三六・二二五頁b）

（注）

①二祖阿難尊者は仏の従弟、総持多聞第一と言われる。迦葉の後をついで、西天における禪宗付法の第二祖となった。『祖堂集』巻一、『景德伝灯録』巻一などに伝有り。本則は、古く裴休『伝心法要』に見え、ほかに『碧巖録』一五則頌古評唱・同九八則本則評唱、『如浄録』巻下、『無門関』二二則等にも録される。

②迦葉尊者は仏の弟子・摩訶迦葉のこと。釈尊より正法を伝えられ禪宗付法の第一祖となったとされる（『天聖広灯録』巻二・迦葉章および巻一・釈迦仏章）。詳しくは、柳田聖山『初期禪宗史書の研究』法蔵館二〇〇〇年、三八七頁 参照。『広灯録』巻二・第一祖摩訶迦葉尊者章に記される拈花微笑の話は次のとおり、「如来、靈山に在りて説法するに、諸天、華を献ず。世尊、華を持つて衆に示す。迦葉微笑す。世尊、衆に告げて曰く、『吾れに正法眼藏・涅槃妙心有り、摩訶迦葉に付嘱す。将来に流布して、断絶せしむる勿れ。』仍つて金縷僧伽梨衣を以て迦葉に付し、以て慈氏を俟つ」（中文三六九頁b）。ちなみに、「拈華微笑」の因縁によって付法されたとする説は、一般に『大梵天王問仏決疑經』が古典とされるが、問題がある。石井修道「拈華微笑の話の成立をめぐる」（『平井俊栄博士古稀記念論集—三論教学と仏教諸思想—』春秋社二〇〇〇年）参照。

③師兄伝仏金欄袈裟外、別伝箇什麼は底本は「師兄伝仏金欄袈裟」に作るが、『統要集』や『会要』はいずれも「世尊伝金欄袈



娑」とする。釈尊が迦葉に金襴の袈裟を授けたとする話については前注に引く『広灯録』参照。この伝承は『大唐西域記』巻九に由来する。「摩訶迦葉波は、声聞弟子なり…中略…如来の化縁斯ち畢り、垂るに涅槃を待てせんとし、迦葉波に告げて曰く、…中略…我れ今、將に大涅槃に入らんと欲す。諸の法蔵を以て、汝に囑累す。住持宣布し、失墜有ること勿れ。姨母献ずる所の金縷袈裟、慈氏の成仏に留めて以て伝付せよ」(天正五一・九一九頁)。詳しくは柳田『初期禅宗史書の研究』三八七頁参照。なお、底本で「別伝」とされるのは、伝法の証拠である金襴の袈裟の外、さらに何が伝承されたのかということ。すなわち「教外別伝」の意を問うところ。

④迦葉召云「召シテ」は一三〇則に「召シテ」の訓が見える。ただし漢語の「召」は呼びよせる意ではなく、大きな声で呼ぶこと。『無門関』ではここを「葉喚びて云く、阿難」に作る。

⑤応諾「ハイ」と返事をする。底本の訓「イラフ」は中古の語で、応える、返事をする、の意。一七四則、一九三則、『永平広録』巻三・上堂二五二、『同』巻四・上堂三一四の「応諾」にも同じ訓が見える。『竹取物語』、「翁いらふるやう、なし給(ひ)。官冠も、わが子を見たてまつらでは、何にかはせむ」(阪倉篤義校注・岩波文庫一九七〇年、四二頁)、『宇治拾遺物語』一・一二、「今こゑよばれていらへん」と、念じてねたる程に「ずちなくて、むこの後にゑい」といらへたりければ」

(中島悦次校注・角川文庫一九六〇年、三二頁)。「日葡辞書」、『Iraye. イラエ (いらへ) Cotate (答) に同じ。返答』、『Iraye. uru. eta. イラエ、ユル、エタ (いらへ、ゆる、へた) 返答する」(岩波書店一九八〇年、三四〇頁)。

⑥倒却門前利竿著「利竿は寺の前に立て、説法中であることを示す幡ざお。よって「利竿を倒す」とは説法終了という意を表わす。即ち今の阿難の応諾によって、すでに「教外別伝」の意は尽くされているというところ。「著」は、命令の語気。ただし底本では置き字扱いとし、「ベシ」と送ることとその意を表す。一九三則、「浄瓶ノ水を添ウベシ(著)」。名を呼ばれてとつさに「応諾」するところに自己の本分事が全現している、それに自ら気づけという趣旨の問答は他にも数多い。例えば「于公又た問う、如何なるか是れ仏。師、于頓と喚ぶ。頓応諾す。師云く、更に別に求むる莫れ」(『景德伝灯録』巻六・紫玉山道通章、九六頁a)、「僧問う、四大五蘊身中、阿那箇か是れ本来仏性。師乃ち僧の名を呼ぶ。僧応諾す。師良久して曰く、汝に仏性無し」(『同』巻七・章敬懷暉章、一〇六頁a)。詳しくは小川隆『語録のことば』(八)「呼時歴歴応」(『傘松』平成一五年一月号)参照。

⑦阿難大悟。「阿難大悟ス。イ本」は、右傍加筆。「イ本」(三百則の異本の一つ)からの添記。底本にはほかに「信濃本」なる異本との校記も見える。一五一則注②参照。なお前掲出典群にこの句はないが、類似の例として、『碧巖録』一五則頌古評唱に次のようにある。「阿難、迦葉に問いて云く、釈尊は金欄の袈裟を伝うる外、別に何の法を伝えしや。」迦葉、阿難」と召ぶ。阿難応諾す。迦葉云く、門前の刹竿を倒却著。阿難遂に悟る。」(上・二二五頁)。

《補注①》

『永平広録』卷三・上堂二五二

上堂、「記得す、阿難、迦葉二問フ、師兄、仏ノ金欄袈裟ヲ伝ふる外、別ニ箇ノ甚麼ヲカ伝ル。」迦葉、阿難ト召す。阿難、応諾。迦葉云く、門前刹竿倒却著。大衆、這箇ノ道理ヲ会すコトヲ要ス麼。」良久して云く、「喚応弟兄、同一声。抽釘未了、還拔楔。倒却門前、刹竿著。今、誰カ家ノ乾屎橛トカ作ル。」(上・二九六頁)

『永平広録』卷八・法語四

「教家道く、是法不可示、言辞相寂滅。如何力是レ言辞相、如何是レ寂滅。」便チ曰ク、「是法則チ言辞相ナリ也、寂滅相ナリ也。向上ノ説話、頂門ニ眼ヲ開イテ真觀ヲ得矣。」

昔シ阿難尊者、迦葉尊者ニ參ジテ便チ問フ、師兄如來ノ金欄法衣ヲ伝ル外、更ニ箇ノ什麼ヲカ伝ル。迦葉云く、阿難。阿難応諾ス。迦葉云く、倒却門前刹竿著。此ヲ聞テ阿難便チ大悟ス。這一段ノ公案、好手ナリ也、閑悟也ナリ。究竟シテ如何是法、如何力不可示。乃チ言辞ノ相、寂滅ナルガ故ニ不可示ナル爾ナリ。…中略…謂ク、夫レ赤肉团上ニ一句半偈・片言少語ヲ留ムルコト莫レ、清冷冷地ニ一分ノ相応ヲ得る也。若シ一言半句モ仏祖ノ言辞・宗門ノ公案ヲ留メバ者、便チ惡毒ナリ也。山僧ガ行履ヲ会せんト欲ハバ、這箇ノ説話ヲ記スルコト勿レ。切忌スラクハ領念センコトヲ。(下・二二四頁)

《補注②》

『宝慶記』二七

柱香して拜問す、「世尊、金欄の袈裟を摩訶迦葉に授伝せしは、是れ何れの時ぞや。」

堂頭和尚慈誨して曰く、「你、這箇の事を問うは最も好きなり。箇箇の人は這箇を問わず、所以に這箇を知らず、乃ち善知識の苦しむ所なり。我れ曾て雪竇先師の処にありて、嘗て這箇の事を問いしに、先師大いに悦ばるるなり。世尊、最初に迦葉の来りて帰依するを見た

まい、即ち仏法並びに金欄の袈裟を以て摩訶迦葉に附嘱し、第一祖となしたもう也。摩訶迦葉は衣・法を頂受し、昼夜に頭陀し、未だ嘗て懈怠せず、未だ嘗て屍臥せず、常に仏衣を戴いて、仏想・塔想を作して坐禅せり。摩訶迦葉は古仏菩薩なり。世尊は摩訶迦葉の來たるを見る毎に、便ち半座を分かちて座せしむ也。迦葉尊者は三十相を具え、唯だ白毫と烏瑟を欠くのみ。所以に仏と並んで一座に座するは、人天の樂見するところなり也。凡そ神通・智慧、一切の仏法は、仏の附嘱を受けて欠減するところなし也。然れば則ち迦葉は仏に見えし最初に、仏衣と仏法とを得たるなり也。」(全集七・二八頁)

〔七〇〕(170) 外道不問有無

世尊<sup>①</sup>、因有外道問<sup>②</sup>：「不問有言、不問無言。」世尊<sup>③</sup>抱坐。外道讚嘆：「世尊大慈大悲、開我迷雲、令我得入。」乃作礼而去。阿難尋白<sup>④</sup>：「外道得何道理、稱讚而去？」世尊云<sup>⑤</sup>：「如世良馬見鞭影而行。」

《書き下し》

世尊<sup>①</sup>（世尊<sup>シツソム</sup>）、因<sup>ア</sup>ニ有ル外道（右・外道有テ）問フ、「有言ヲ問ハ不<sup>ズ</sup>、無言ヲ問ハ不<sup>ズ</sup>。」世尊<sup>③</sup>抱坐ス。外道讚嘆ス、「世尊大慈大悲、我が迷雲ヲ開テ、我ヲ令テ得入セシム。」乃チ礼ヲ作シテ《而》去ル。阿難尋<sup>シ</sup>テ仏ニ白シテ言ク、「外道何ナル道理ヲ得テカ、稱讚シテ《而》去ル？」世尊云ク、「世ノ良馬ノ鞭ノ影ヲ見テ《而》行クガ如シ。」

《現代語訳》

世尊に、ある外道が質問した、「有言は問いませぬ、無言も問いませぬ。」世尊は黙って居ずまいを正した。外道は讚嘆して言った、「世尊の大慈悲は、迷いの雲を開き、私を悟らせて下さいました。」そして礼拝して去った。

阿難はそれに続けて世尊に質問した、「かの外道は、いかなる真理を得てかように称賛して行つたのでしょうか。」世尊、「鞭の影を見ただけで走る駿馬の如くであった。」

《出典》

(A) 『宗門統要集』 卷一 (一一頁<sup>a</sup>)

(B) 『景德伝灯録』 卷二七・諸方雜拏徵拈代別語 (五六四頁<sup>b</sup>)

『建中靖国統灯録』 卷二八 (統藏一三六・一八九頁<sup>a</sup>)

『聯灯会要』卷一(統藏一三六・二二二頁b)

『圓悟錄』卷一七・拈古(大正四七・七九二頁c)

『圓悟錄』卷一八・頌古(大正四七・七九九頁a)

『大慧錄』卷八(大正四七・八四四頁b)

大慧『正法眼藏』卷下(二一九頁a)

『雪竇頌古』六五(二八五頁)／『碧巖錄』六五則本則(中・二九二頁／一夜本八七三頁a)

〈注〉

①世尊＝釈迦牟尼仏のこと。本則は右出典群のほか、『祖堂集』卷一(二三頁)、永明延寿『注心賦』卷一(統藏一一・一二頁a)、『四明尊者教行錄』卷四・「忠法師天童四明往復書後敘」(大正四六・八九六頁c)、『從容錄』七則頌古評唱(大正四八・二三二頁c)、『無門関』三二則(大正四八・二九七頁a)など、多数の語録や公案集に引かれる。『禅学大辞典』(二七五頁b)や禅の語録15『雪竇頌古』(二八六頁)は、『首楞嚴經』卷四を本則の典拠とするが、柳田聖山「禅の仏伝」(『印度学仏教学研究』二五・二六頁b、一九六五年)は「経律的な典拠を見出し難い」とし、『摩訶止観』卷二之下や『止観輔行伝弘決』卷二之五との関連を指摘する。さらに風間敏夫「外道問仏」は本則の成立を、「阿含以来の長爪説話」をもととして「直接には大智度論一を源泉とし、摩訶止観を通過することによって形成された」ものと推測している(『印度学仏教学研究』五八・九五頁a、一九八一年)。補注①を参照。また関連論文に、石井修道「『四馬』考」(駒澤大学仏教学部研究紀要)五九、二〇〇一年)がある。

②外道問、不問有言、不問無言＝「外道」は仏教以外の異端の宗教者・思想家。「不問有言、不問無言」は、言語と言語の否定と、その双方をともに超えたところを示せという要求。一五七則、「疎山、瀉山に到り便ち問う、承<sup>うけ</sup>わるに師に言えること有り、有<sup>あ</sup>句・無<sup>な</sup>句、藤の樹に倚るが如し」と。忽然として樹倒れ藤枯れば、句、何<sup>い</sup>処<sup>ところ</sup>にか帰す。『臨濟録』勘弁一二、「師、第二代徳山の垂示して、道い得るも也た三十棒、道い得ざるも也た三十棒」と云うを聞いて、師、楽普<sup>らくふ</sup>をして去いて、道い得るに什麼としてか也た三十棒なる」と問うて、伊が汝<sup>か</sup>を打つを待つて、棒を接住し、送一送して、他が作麼生<sup>いかん</sup>かを看しむ」(一六三頁)。

③抛座＝「抛座」は座につき威儀を正して坐することだが、禅録では、坐したまま沈黙することを表す。出典群Bの多くは「抛

坐」を「良久」に（『圓悟錄』『続灯録』等）、また『正法眼藏』『四馬』卷はこれを「拋坐良久」に作る。二則、「洪州黃檗山斷際禪師（百丈に嗣ぐ、諱は希運）嘗て百丈に問う、従上の宗乘、如何が人に指示せん。百丈座に拋る。師曰く、後代の児孫、何を將つて伝授するや。百丈曰く、我れ、你は是れ箇の人と將<sup>おも</sup>えり、便ち方丈に帰る。『臨濟錄』行録一、「師、行脚の時、龍光に到る。光、上堂す。師、出でて問う、鋒鋌を展べずして、如何が勝つことを得ん。光、拋坐す。師云く、大善知識、豈に方便無からんや」（二〇〇頁。一二六則の「良久」が『聯灯会要』卷二〇・韓愈章では「拋坐」となっていることもあわせて参考となる（続藏一三六・三七七頁d）。

④開我迷雲Ⅱ『首楞嚴經』卷四の語。「惟<sup>た</sup>だ願はくは如来、大慈を宣流し、我が迷雲及び諸の大衆（の迷雲を開きたまえ（開我迷雲及諸大衆）」（大正一九・一九九頁c）。

⑤阿難尋白仏言Ⅱ阿難は一六九則に既出。釈尊入滅後、摩訶迦葉にしたがって開悟したといわれ、世尊在世中はなお未悟であったとされる。「尋」は、前の行為に続いて次の行為がなされることを表す。別訳『雜阿含經』卷一一、「即ち坐より起ち、高座を敷き置き、尋いで仏に白して言さく、此の坐に就く可し」（大正二・四四九頁c）。

⑥如世良馬見鞭影而行Ⅱ外道を賛歎することば。衆生の機根を四種の馬に喩えたうちの第一のもので、言われぬ先に意をさとする最上の機根に喩える。ただし、ここは外道を賛嘆しながら、実は阿難の鈍根をとがめる言外の意の方に重点がある。「さきほどの外道はわが、拋坐」を一見しただけでただちにその意を察した（それにひきかえ、同じものを見ていたはずのお前の方は……）。別訳『雜阿含經』卷八、「我、是の如く聞けり。一時、仏、舍衛国の祇樹給孤獨園に在り。爾の時、世尊、諸の比丘に告げたもう。『四種の馬有り。賢人は応に乗るべし。是れ世間に有る所。何等をか四と為す。其の第一の者は、鞭影の挙がるを見て、即便ち驚悚して、御者の意に随う。其の第二の者は、鞭、身毛に触れて、即便ち驚悚して、御者の意に称<sup>かな</sup>う。其の第三の者は、鞭、身肉に触れて、然る後、乃ち驚き、御者の意に随う。其の第四の者は、鞭、肉骨に徹して、然る後に乃ち驚き、御者の意に称<sup>かな</sup>う』（大正二・四二九頁b）。このほか鞭影の比喩は、『雜阿含經』卷三三、北本『涅槃經』卷一八、『摩訶止観』卷二之三、『止観輔行伝弘決』卷二之五等に見える。『正法眼藏』『四馬』卷は、この問答の拈提に続いて、鞭影・四馬に関する経論のいくつかを例示し、論を進めている。

《補注①》

『大智度論』卷一

爾の時、舍利弗、受戒すること初かに半月、仏辺に侍立し扇を以て仏を扇ぐ。長爪梵志、仏に見え問訊し訖りて一面に坐して是の念を作す。〃一切の論は破す可し、一切の語は壊す可し、一切の執は転ず可し。是の中、何者か是れ諸法実相。何者か是れ第一義。何者か性。何者か相。顛倒せず、是の如く思惟す。譬えば大海の水の中に其の涯底を尽さんと欲するが如し。之を求むること既に久しくも、一法も実に以て心に入る可き者を得ず。〃彼(Ⅱ世尊)、何の論議を以て道い、我が姉子(Ⅱ舍利弗)を得るや。〃是の思惟を作し已わりて仏に語して言く、「瞿曇よ、我は一切の法を受けず」と。仏、長爪に問う、「汝、一切の法を受けず。是の見も汝は受けざるか、となり。爾の時、長爪梵志、好馬の鞭影を見て、即ち覺し便ち正道に著くが如し。長爪梵志も亦た是の如く、仏語を得て、鞭影、心に入る。即ち貢高を棄捐し慚愧低頭して、是の如く思惟す…中略…

復た次に二種の説法有り。一は諍処、二は不諍処。諍処は余の經中に説くが如し。今、無諍処を明さんと欲するが故に、是の般若波羅蜜經を説きたもう。有相・無相、有物・無物、有依・無依、有対・無対、有上・無上、世界・非世界、亦た是の如し。問うて曰く、「仏の大慈悲心は但だ応に無諍法を説く。何を以て諍法を説くや。」答えて曰く、「無諍法は皆な是れ無相にして常寂滅、説くべからざるなり。今、布施等、及び無常・苦・空等の諸法を説くは、皆な寂滅・無戲論の爲の故に説くなり。利根の者は仏意を知りて諍を起こさず。鈍根の者は仏意を知らず、相を取り、心を著するが故に諍を起こす。此の般若波羅蜜は諸法畢竟空なるが故に諍処無し。若し畢竟空を得べきも諍うべき者は、畢竟空と名づけず。是の故に般若波羅蜜經を無諍処と名づく。有無の二事、皆、寂滅なるが故に。」(大正二五・六一頁c)

《補注②》

本則は『正法眼蔵』「四馬」卷に見えるが、出典は『景德伝灯録』卷二七・諸方雜拳徴拈代別語と本書の合條。

『正法眼蔵』「四馬」卷

世尊一日、外道来詣仏所問仏、「不問有言、不問無言。」世尊抛坐良久。外道礼拝讚歎云、「善哉世尊、大慈大悲、開我迷雲、令我得入。」乃作礼而去。外道去了、阿難尋白仏言、「外道以何所得、而言得入、称讚而去。」世尊云、「如世間良馬、見鞭影而行。」

祖師西来よりのち、いまにいたるまで、諸善知識おほくこの因縁を挙して参学のともがらしめすに、あるいは年載をかさね、あるい

は日月をかさねて、まゝに開明し、仏法に信入するものあり。これを外道問仏話と称ず。しるべし、世尊に聖默聖説の二種の施設まします。これによりて得入するもの、みな「如世間良馬見鞭影而行」なり。聖默聖説にあらざる施設によりて得入するも、またかくのごとし。  
(四・三三〇頁)

〔七二〕(171) 法眼不知親切

昇州<sup>①</sup>清涼院、大法眼禪師、以玄機<sup>②</sup>一発、雜務俱捐。結侶<sup>③</sup>擬之湖外。既行值天雨、忽作溪流暴漲。暫寓城西地藏院。因參老琛和尚。琛問曰：「上坐何往？」師曰：「邇<sup>④</sup>逕行脚去。」琛曰：「行脚事作麼生？」師云：「不知。」琛曰：「不知是最親切。」師豁然大悟。

〔書き下し〕

昇州<sup>シヤウシュウ</sup>(昇州)清涼院<sup>シヤウリヤウイン</sup>(清涼院)ノ大法眼禪師、玄機<sup>ゲンキ</sup>一発スルニ以テ、雜務<sup>トモ</sup>俱ニ捐ツ。結侶<sup>ケツリョ</sup>シテ湖外<sup>ウケイ</sup>ニ(湖外ニ)之カント擬<sup>ギ</sup>ス。既ニ行クトキ天雨ニ値フテ、忽ニ溪流暴漲<sup>ボウチャウ</sup>を作ス。暫ラク城西ノ地藏院ニ寓<sup>グ</sup>ス。因ミニ老琛和尚ニ參ズ。琛問テ曰ク、「上坐<sup>シヤムツ</sup>何クエカ往ク。」師曰ク、「邇<sup>イ</sup>逕トシテ行脚シ去ル。」琛曰ク、「行脚ノ事作麼生。」師云ク、「知ラ不(不知)。」琛曰ク、「不知是レ最モ親切(最親切)ナリ。」師、豁然トシテ大悟ス。

〔現代語訳〕

昇州清涼院の大法眼禪師は、玄妙なる心の動きがにわかに起こって、それまでの諸々の学業を全て放下した。仲間とつれだつて湖南へ向かおうとしたが、道中で雨に遭い、一気に谷川が増水したので、とりあえず、閩城の西にある地藏院に身を寄せた。そこで桂琛和尚に参じた。桂琛、「そこもととはどちらへ往かれる？」法眼、「あちらこちらと行脚して廻ろうと存じます。」桂琛、「しからば、行脚とはいいかなるものぞ？」法眼、「わかりませぬ。」桂琛、「うむ、そのわからぬということが最も適つておる。」師はカラリと大悟した。

〔出典〕

(A) 『景德伝灯録』卷二四(四七九頁a)

(B) 『宏智録』卷二・頌古二〇(八九頁a)

『禪門拈頌集』卷二八(四八〇頁<sup>a</sup>)

〈注〉

①昇州清涼院大法眼禪師『法眼文益のこと。一一一則、一二二則、一三五則に既出。本則は『從容錄』二〇則にも採られる。また前後の経緯については、『禪林僧宝伝』卷四・金陵清涼益章に詳しい。補注①参照。

②玄機一発、雜務俱捐。奥深い心の動きがにわかにはたらく出て禪の道を志すようになり、律学や儒学、詩文等の学業をすべて放擲するに至った。『景德伝灯録』卷二四・清涼文益章、「七歳、新定智通院全偉禪師に依りて落髮し、弱齡にして具を越州開元寺に稟く。律匠希覺師の化を明州鄞山育王寺に盛んにするに属い、師、往きて聴習に預り其の微旨を究む。復た傍らに儒典を探り、文雅の場に遊ぶ。覺師、目づけて我が門の遊夏(子遊・子夏)と為す也。師、玄機一発するを以て雜務俱に捐つ」(四七九頁<sup>a</sup>)。『禪林僧宝伝』卷四・金陵清涼益章、「越州開元希覺律師に詣り、具足戒を受く。覺公の化を四明に盛んにするに及び、益、往きて毘尼を習い、文章に工<sup>たくみ</sup>たり。覺、大いに之を奇とするも、俄かに辞し去る」(柳田・椎名編・禪学典籍叢刊五・一六頁<sup>a</sup>、臨川書店一九九九年)。

③結侶擬之湖外。同志とともに明州から南下して泉州の長慶慧稜の法会に参じたが機縁契わず、更にそこから西の湖南地方へ向かおうとした。『從容錄』一二則・本則評唱では行を共にしたのは龍濟紹修(修山主)、清涼院休復(悟空)、清溪洪進(進山主)であったとし、何れものち桂琛の法嗣となっている。「湖外」は『宋高僧伝』卷一三では「湖湘」につくる(大正五〇・七八八頁<sup>b</sup>)。

④老琛和尚。羅漢桂琛(八六七〜九二八)。一二則に地藏院琛禪師、一三則に羅漢院和尚として既出。

⑤上坐。『上座』『大德』『闍梨』は、本来、高位の僧をさす尊称であるが、禪籍ではいずれも、老師から修行僧を鄭重に呼ぶのに用いられる。二八四則、「西院曰く、適<sup>そく</sup>来の<sup>そなた</sup>両錯は、是れ老僧の錯りか、是れ上座の錯りか」。八則、「南岳是れ法器なりと知り、師(馬祖)の所に往き、問うて曰く、大德、坐<sup>そな</sup>禪して箇の什麼をか<sup>は</sup>図る」。五七則、「道吾山宗智禪師、葉山を離れて南泉に到る。泉問う、闍梨、名は什麼ぞ」。自分の直接の弟子となつていない僧に用いることが多い。

⑥遯遁行脚去。あてどなく、いろいろなところを巡つて参るつもりです。「遯遁」は「遁遁」とも。曲がりくねつて続くさま。『宋高僧伝』卷七・大善寺虚受伝、「難を逃れ、遯遁として越の大善寺に抵る」(大正五〇・七四七頁<sup>b</sup>)。『景德伝灯録』卷一六・



巖頭全豁章、「餘杭大慈山より迤邐として臨済に造る」(三〇七頁a)。

⑦行脚事作麼生。行脚という行為そのものの意味、それをどう捉えているか。『景德伝灯録』卷二五・百丈道常章、「僧問う、如何なるか是れ学人行脚の事。」師曰く、「拄杖を拗折し得たる也未」(五三三頁a)。『碧巖録』一七則・本則評唱、「凡そ衆に示して云く、大凡そ行脚して、知識を参尋せんには、眼を帯びて行かんことを要す。須らく縑素を分かち、浅深を看て始めてし」(上・二三三頁)。

⑧不知是最親切。それを知らずにいることが、むしろそれに最も適う。それを知の客体としないことによつて、自らが常にそれとともにあることになる。『肇論』涅槃無名論、「然れば則ち玄道は絶域に在り、故に不得にして以つて之を得る。妙智は物外に存する乎、故に不知にして以つて之を知る」(大正四五・一六一頁b)。『景德伝灯録』卷一九・保福從展章、「問う、摩騰、漢に入りて一藏分明たり、達磨西来して何を將つてか指示す。」師曰く、「上座行脚の事、作麼生。」曰く、「不会。」師曰く、「不会を会取してこそ好し。傍家に人の処分を取る莫れ」(三七五頁b)。「親切」はものごとにピタリと即すること。切実であること。『玄沙広録』卷下、「問う、学人親切の処、師に一言を請う。」師云く、「識得せば即ち得し。」云く、「請う、和尚の直に道うことを。」師云く、「聾を患いて作什麼」(禅文化訳注本三・五一頁／続藏二六・一九五頁b)。『碧巖録』一四則・頌古評唱、「古人道く、親切を得んと欲さば、問を將ち来りて問う莫れ。問は答処に在り、答は問端に在り」(上・二〇五頁)。

#### 《補注①》

『禅林僧宝伝』卷四・金陵清凉益章

禅师、諱は文益。餘杭魯氏の子なり。七齡にして秀発、新定全律師に依りて落髮す。越州開元希覺律師に詣り、具足戒を受く。覺公の化を四明に盛んにするに及び、益、往きて毘尼を習ひ、文章に工たり。覺、大いに之を奇とするや、俄かに辞し去る。初め長慶稜道者に謁するも、契悟する所なし。善、修、洪進と与に、漳州より湖外に抵る。將に発せんとして雨ふり、溪壮にして濟る可からず。顧みるに城隅に古寺有り。包を解きて門下に休む。雨止まず、堂に入る。老僧の地鑪に坐する有り、益を見て曰く、「此の行、何にか之。」曰く、「行脚し去く。」又た問う、「如何なるか是れ行脚の事。」对えて曰く、「不知。」曰く、「不知、最も親し。」益、之れを疑う。三人の者、火に附いて、鑒公の語を挙す。天地と我と同根の処に至るに、老僧又た曰く、「山河大地と自己と、是れ同なるか、是れ別なるか。」益曰く、「同。」蹠、兩指を豎て、熟視して曰く、「兩箇なれば即ち起し去らん。」益、大いに驚き、廊廡を周行す。字額を讀むに、曰く「石

山地蔵。」顧みて修輩に語けて曰く、「此の老、琛禪師なり。」意に留止まらんと欲するも、語未だ卒らざるに、琛、又た至る。雨、已に止み、業已に行と成る。琛、之を送り、問うて曰く、「上座、尋常、三界唯心を説く。」乃ち庭下の石を指して曰く、「此の石は心内に在るや、心外に在るや。」益曰く、「心内に在り。」琛、笑いて曰く、「行脚の人、甚の来由に着りて、塊石を心頭に安く耶。」益、以って之に對する無し。（柳田・椎名編・禅学典籍叢刊五・一六頁、臨川書店一九九九年）

《補注②》

『永平広録』卷一・上堂五九

上堂。挙ス、法眼禪師、因ニ琛禪師ニ參ず。問フ、上座何往。法眼云ク、遷進行脚去。琛云ク、行脚事作麼生。法眼云ク、不知。琛云ク、不知是最親切。法眼豁然トシテ大悟ス。

師云ク、若シ是レ、興聖ナラバ、地藏和尚に向テ道ベシ、不知是最親切知也、最親切ナル親切ハ一任。最親切ナリトモ、且ク地藏に問フ、親切トハ箇甚麼。（上・八二頁）

『永平広録』卷九・頌古一六

法眼禪師、因ニ琛禪師ニ參ズ。問フ、上座何クヘカ往ク。法眼云ク、遷進行脚去。琛云ク、行脚事作麼生。法眼云ク、不知。琛云ク、不知是最親切。法眼豁然トシテ開悟ス。

騰騰了了トシテ又タ騰騰タリ、行脚何ゾ闊カラン曲直ノ繩、若シ大成方一寸ヲモ欠けば、其ノ知弥ナシ二三升。（下・二九四頁）

〔七二〕（172）洞山仏麻三斤

洞山、有僧問：「如何是仏？」山云：「麻三斤。」僧有悟、便礼拜。

《書き下し》

洞山、僧有テ（有ル僧）問ふ、「如何か是レ仏。」山云く、「麻三斤。」僧悟ルコト有テ、便チ礼拜ス。

《現代語訳》

洞山に、ある僧が尋ねた、「ホトケとは如何なるものでしょう。」

洞山、「三斤の麻だ。」

僧はそこで悟るところが有り、即座に礼拝した。

《出典》

(B) 大慧『正法眼藏』卷上(一七頁a)

『聯灯会要』卷二六(統藏一三六・四三四頁a)

『嘉泰普灯錄』卷二六(統藏一三七・一八九頁c)

『雪竇頌古』一二(四二頁)／『碧巖錄』二二則本則評唱／『一夜本』一二則本則評唱

《注》

①洞山＝雲門文偃の法嗣、洞山守初(九一〇～九九〇)のこと。洞山良价(八〇七～八六九)とは別人。『景德伝灯録』卷二三などに語を録す。本則は前記出典群のほか、『景德伝灯録』卷二二・双泉師寛章、『從容録』七三則本則評唱、『無門関』一八則などにも見える。なお本問答については、入矢義高『麻三斤』(『自己と超越』岩波書店一九八六年、八七頁、芳沢勝弘『麻三斤・再考』『禅文化』一六〇、一九九六年、沖本克己『禅宗の教団(六)・閑語その1語中無語』『禅文化』一六一、一九九六年)等を参照。

②麻三斤＝三斤の麻布。前掲入矢論文によれば、三斤は唐代における麻布流通の基本単位で、それはあたかも僧衣一着分に相当するという。ちなみに『碧巖錄』一二則本則評唱には、『麻三斤』に対する宋代禅門の通俗的な理解が、以下のように批判的に列挙されている。「人多く話を作して道う、洞山是の時庫下に在って麻を秤る。僧の問うもの有り、所以に此の如く答う」と。有る底は道う、洞山東を問われ西を答う」と。有る底は道う、あなたは是れ仏なるに、更に去きて仏を問う、所以に洞山は邊路に之れを答う」と。死漢更に一般有って道う、只だこの麻三斤便ち是れ仏」と。且得没交涉。你若し恁麼に洞山の句下<sup>もと</sup>に去いて尋討せば、参じて弥勒仏下生に到るも、也た未だ夢にも見ざる在<sup>なり</sup>」(上・一八三頁)。

③僧有悟、便礼拝＝この句は出典群の諸本にはなく、『三百則』で独自に付加されたもの。なお、宋代の看話禅におけるこの語の扱いについて、朱熹が次のように説いている。「禅は只だ是れ一箇の呆守法、麻三斤、乾屎橛の如きは、他の道理、初めより這の上に在らず、只だ是れ他を教<sup>か</sup>て麻了<sup>マヒ</sup>し、只だ這の一路を思量せしむるのみ。專一にして積むこと久しく、忽ちに見<sup>けん</sup>処有らば、便ち是れ悟りなり」(『朱子語類』卷二六・中華書局点校本、三〇二九頁)。

《補注①》

『五灯会元』卷一五・福嚴良雅章

潭州福嚴良雅禪師、洞山の第一座に居す。山、參する次に、僧出でて問う、「如何なるか是れ仏。」山答えて曰く、「麻三斤。」參じ罷り、山、寮に至りて師に謂いて曰く、「我れ今日、這の僧に答えし話、得き麼？」曰く、「恰も某の淨髮に値う。」山曰く、「你是元來と這の去就を作すか。」袖を払いて便ち出ず。師曰く、「這の老漢、我れ他の這の話を明かし得ざると將謂う。」因に偈を作りて呈して曰く、「五彩もて牛頭を畫き、黄金もて点額と爲す。春晴二月の初め、農人皆な則を取る、寒食に新正を賀い、鉄錢三五」と。山見て深く之を肯う。(中華書局九七八頁)

《補注②》

『永平広録』卷九・頌古六八

僧、洞山ノ守初和尚ニ問フ、「如何カ是レ仏。」山云ク、「麻三斤。」

洞山ノ仏ハ是レ麻三斤、還テ恩深キコト有レバ怨モ亦タ深シ、海枯レテ終ニ徹底スルコトヲ見ント要セバ、始テ知ヌ人死シテ心ヲ留メ  
不ルコトを。(下・三四〇頁)

『典座教訓』

嘗觀すべし、当戰前來の有道は、其の掌・其の徳、自ずから符うことを。大瀧の悟道も典座の時なり也。洞山の麻三斤も亦た典座の時  
なり也。(六・二二〇頁)

所謂大心とは其の心を大山にし、其の心を大海にし、偏無く党無き心なり也。…中略…洞山和尚、大の字を知らざれば、三斤の麻を拈  
じて一僧に示すこと莫し。応に知るべし、向來の大善知識は、俱に是れ百草頭上に大の字を學し來りて、今乃ち自在に大声を作し、大義  
を説き、大事を了じ、大人を接し、者箇の一段の大事因縁を成就する者なり也。(六・二四頁)

『正法眼藏隨聞記』卷五

如來ニシタガツテ得道スルモノ多ケレドモ、又阿難ニヨリテ悟道スル人モアリキ。新首座非器也ト卑下スルコトナク、洞山ノ麻三斤ヲ拳  
揚シテ同衆ニ示スベシト云ツテ、座ヲオリテ、再び鼓ヲ鳴ラシテ、首座秉払ス。是れ興聖最初ノ秉払也。辨公三十九ノ年也。(一四二頁  
a / 二八六頁)

〔七三〕(173) 憲宗迎仏舍利

韓愈<sup>①</sup>文公、因唐憲宗<sup>②</sup>皇帝、迎仏舍利、入大内供養、夜放光明。早朝宣問。郡臣<sup>③</sup>皆賀：「陛下聖德聖感。」唯文公不賀。上宣問：「郡臣皆賀、独卿何不賀？」文公因奏對：「微臣嘗看仏書況仏光非青黃赤白等。此是龍神衛護之光。」上宣問：「如何是仏光？」文公無對。因以罪請出。

〔書き下し〕

韓愈文公、因二唐ノ憲宗<sup>クヰム</sup>皇帝、仏舍利ヲ迎ヘテ、大内ニ入レテ供養セラル、ニ、夜ル光明ヲ放ツ。早朝ニ(早朝<sup>シム</sup>)宣問ス。郡臣皆賀スラク、「陛下ノ聖德聖感ナリ」ト。唯文公賀セ不。上宣問ス、「群臣皆賀ス、独リ卿何ゾ賀セ不ル？」文公因ニ奏對ス、「微臣嘗テ仏書ヲ看ルニ況ク仏光ハ青黃赤白等ニ非ズ。此レハ是レ(此是ハ)龍神衛護ノ(之)光ナリ。」上宣問ス、「如何是レ仏光？」文公對フルコト無シ(無對)。因ニ罪ヲ以テ請出ス(以罪請出)。

〔現代語訳〕

韓愈文公。あるとき唐の憲宗皇帝が仏舍利を迎えて宮中で供養すると、夜、それが光を放った。翌朝、皇帝は臣下たちに尋ねた。臣下たちはみな口々に賛嘆して言った、「閣下の御威徳に感応した瑞祥にございます。」だが、ただひとり、韓愈だけは賛嘆しなかった。皇帝が下問した、「臣下たちはみな褒め称えておるのに、貴殿ひとり、なぜ称えぬのか。」韓愈は上奏して回答した、「わたくしめがかつて読みました仏書には、仏の光には青・黄・赤・白などの相はない」とございました。昨夜のものは仏法を守護する龍神が発したものでございます。」皇帝、「では仏の光とは如何なるものか？」韓愈は答えられなかった。そこで彼は罪を得て左遷された。

〔出典〕

(A) 『宗門統要集』 卷七(一五五頁a)

(B) 『聯灯会要』 卷二〇(統藏一三六・三七八頁a)

〔注〕

①韓愈文公＝韓愈(七六八―八二四)。字、退之。文公は諡。憲宗の仏舍利供養に対し、元和一三年(八二八)「仏骨を論ずる表」を上奏して潮州刺史に貶せられた。一二六則注①参照。本則は右出典のほか『祖堂集』卷五にも録され、そこには韓愈が潮州

に流されて大顚と出会う話が収められている。補注①ならびに柳田聖山「仏骨の表―韓愈と大顚」(『純禪の時代―祖堂集ものがたり』禪文化研究所一九八四年) 参照。

②憲宗皇帝、迎仏舍利、入大内供養。憲宗(七七八―八二〇)／在位は八〇五―八二〇。唐朝一二代目の皇帝。『新唐書』卷七・憲宗紀、「(正和三年／八一八)十二月庚戌、仏骨を鳳翔より迎う」。仏舍利信仰については、西脇常記「舍利信仰と僧伝におけるその叙述―慧洪『禪林僧宝伝』叙述の理解のために」(『禪文化研究所紀要』一六、一九九〇年／『唐代の思想と文化』創文社二〇〇〇年、再録) 参照。

③郡臣皆賀、陛下聖德聖感。『郡臣』は、「群臣」の誤記(出典類および三百則諸本、いずれも「群臣」に作る)。「聖德聖感」は、有徳の天子の治世に現れる瑞相。

④看仏書況仏光非青黄赤白等。仏書がなにを指すかは未詳。『大般涅槃經』卷二・光明遍照高貴徳王菩薩品第十之一、「時に大衆の中に忽然の頃に大光明有り。青に非ずして青を見、黄に非ずして黄を見、赤に非ずして赤を見、白に非ずして白を見、色に非ずして色を見、明に非ずして明を見、見に非ずして而も見る」(大正二二・四八八頁c)。『梵網經』卷二・菩薩心地戒品十下、「仏即ち口より無量光明を放つ。…中略…光光は青黄赤白黒に非ず、色に非ず心に非ず、有に非ず無に非ず、因果の法に非ず」(大正二四・一〇〇四頁b)。なお『金沢文庫資料全書』卷一ならびに『続曹洞宗全書』宗源補遺は、底本「況」を「説」に翻刻するが、底本所載の「説」字の言偏はすべて「言」と明確に表記されていてくずしは存在せず、また、『統要集』もこれを「況」に作っているのので、今それに従う(底本の二四八則四行目で「説」字と「況」字を比較することができる)。底本はこれを強いて「況ク」と訓んでおり、それは『正法眼蔵』「光明」巻の訳(補注③)とも一致するが、「況」字に従うなら「微臣、嘗て仏書の仏光を況<sup>な</sup>うるを見るに、青黄赤白等に非ず」と訓むことになろう。

⑤龍神衛護之光。仏そのものの光でなく、それを守護する龍神の光。仏光よりも低次元の有相の瑞祥。『大智度論』卷七、「復た次に光明神力に下・中・上有り。呪術・幻術にて能く光明変化を作すは下なり。諸天・龍神の報を得る光明神力は中なり。諸三昧に入り、今世の功徳心力を以て大光明を放ち大神力を現ずるは上なり」(大正二五・一二二頁a)。

⑥文公無対。韓愈は仏光を知識としては知っていたが、無相なる仏光そのものを体得してはいなかった。『祖堂集』卷五・大顚宝通章では、韓之が潮州に流されて大顚と出会う話がつづき、そこに次のような問答が記されている。「韓愈」進みて曰く、

如何なるか是れ仏。師（大顛）「侍郎」と喚ぶ。侍郎応諾す。師曰く、看よ、還た見ゆる摩……」。我が身の活きたはたらきこそが眞の「仏光」だということころ。「応諾」の意味については一六九則注⑤参照。

⑦因以罪請出韓愈が皇帝の怒りに触れて左遷された話は、『旧唐書』卷一六〇・韓愈伝、『新唐書』卷一七六・韓愈伝等に詳しい。補注②参照。

### 《補注①》

『祖堂集』卷五・大顛宝通章

大顛和尚は石頭に嗣ぐ、潮州に在り。元和十三年戊戌の歲、眞身を迎う。元和皇帝（憲宗）、安遠門に於いて躬自ら香を焚き、迎候して頂礼せり。皇帝及び百寮俱に五色の光の現わるるを見る。皆云く、「是れ仏光なり」と。百寮は聖感を拝賀せるも、唯だ侍郎韓愈一人有りて独り言く、「是れ仏光ならず。」聖徳を拝賀するを肯わず。帝問う、「既に是れ仏光ならざれば、当た此れ何の光ぞ。」侍郎、當時対えを失し、潮州に貶さる。

侍郎、便ち潮州に到りて左右に問う、「此間に何かしら道德高行の禅流有りや。」左右対えて曰く、「大顛和尚なる有り。」侍郎、使いを往かせ彼を三たび請せしむるも、皆く赴かず。後に和尚、方めて仏光の故を聞き、乃ち自ら来る。侍郎、相見を許さず人にして問わしむ、「三請して赴かざるに、如今、什麼と為てか屈せざるに自ら来たる。」師云く、「三請して赴かざるは侍郎の爲ならず、屈せずして自ら来たるは只だ仏光の爲なり。」侍郎、聞き已わりて喜悅して則ち前旨を申ふ。「弟子其の時云く、是れ仏光ならず」と。道理に当れる不。」師答えて曰く、「然り。」侍郎云く、「既に是れ仏光ならざれば、當時は何の光ぞ。」師曰く、「当に是れ天龍八部、釈梵助化の光なり。」侍郎云く、「其の時京城に若し一人師の似き者有らば、弟子、今日終に此に来らざりしものを。」侍郎又た問うて曰く、「未審ず仏に還た光有り也無。」師曰く、「有り。」進みて曰く、「如何なるか是れ仏光。」師、喚びて云く、「侍郎。」侍郎、応諾す。師曰く、「看よ、還た見る摩。」侍郎曰く、「弟子、這裏に到つて却つて会せず。」師云く、「這裏に若し会得せば是れ眞の仏光なり。故に仏道は一道にして青・黄・赤・白の色に非ず。須弥・盧圍を透過して、山河大地を遍照す。眼に見るに非ず、耳に聞くに非ず、故に五目は其の容を觀ず、二聴は其の響を聞かず。若し這个の仏光を識得せば、一切の聖凡は虚幻にして能く惑わすこと無し也。」（一二二頁）

### 《補注②》

『新唐書』卷一七六・韓愈伝

憲宗 使者を遣して鳳翔に往かしめ、仏骨を迎えて禁中に入ること三日、乃ち仏祠に送る。王公士庶、奔走して膜<sup>ほ</sup>唄<sup>ばい</sup>し、夷法もて体膚を灼<sup>や</sup>き、珍貝<sup>ちんがい</sup>を委<sup>す</sup>て、騰香<sup>とうかう</sup>として路に係<sup>か</sup>がるを爲すに至る。愈聞きて之を惡<sup>にく</sup>み、乃ち上表して極諫す。帝大いに怒り、持して宰相に示し、將に抵<sup>あ</sup>つるに死を以てせんとす。裴度、崔群曰く、「愈の言は許<sup>ゆる</sup>悟<sup>ご</sup>、之を罪するは誠に宜<sup>よ</sup>なり。然れども内に至忠を懷かざれば、安んぞ能く此に及ばん。願わくは少しく寛<sup>かん</sup>假<sup>か</sup>せられ、以て諫争<sup>かんそう</sup>を來たらせられんことを。」帝曰く、「愈、我の仏を奉ずること太<sup>お</sup>いに過ぎたりと言は、猶お容<sup>ゆる</sup>すべし。東漢に仏を奉じて以後、天子咸な天促<sup>てんそく</sup>すと謂うに至りては、言何んぞ乖刺<sup>かいし</sup>なる耶。愈人臣にして狂妄して敢えて爾<sup>も</sup>す。固<sup>もと</sup>より赦<sup>ゆる</sup>すべからず。」是において中外駭懼<sup>がいぐ</sup>し、威里の諸貴と雖も、亦た愈の爲に言う。乃ち潮州刺史に貶<sup>おとし</sup>さる。（『唐代の詩人—その伝記』大修館書店一九七五、三三五頁・小南一郎訳注）

### 《補注③》

#### 『正法眼藏』「光明」卷

唐憲宗皇帝者、穆宗・宣宗兩皇帝の帝父なり。敬宗・文宗・武宗三皇帝の祖父なり。仏舍利を拝請して、入内供養のちなみに、夜放光明あり。皇帝大悦し、早朝の群臣、みな賀表をたてまつるにいはく、「陛下の聖德聖感なり。」ときに一臣あり、韓愈文公なり。字は退之といふ。かつて仏祖の席末に參學しきたれり。文公ひとり賀表せず。憲宗皇帝宣問す、「群臣みな賀表をたてまつる、卿なんぞ賀表せざる。」

文公奏對す、「微臣かつて仏書をみるにいはく、仏光は青黃赤白にあらず。いまのはこれ龍神衛護の光明なり。」皇帝宣問す、「いかにあらんかこれ仏光なる。」文公無對なり。

いまこの文公、これ在家の士俗なりといへども、丈夫の志氣あり。回天轉地の材といひぬべし。かくのごとく參學せん、學道の初心なり。不如是學は非道なり。たとひ講經して天花をふらすとも、いまだこの道理にいたらずは、いたづらの功夫なり。たとひ十聖三賢なりとも、文公と同口の長舌を保任せんとき、發心なり、修証なり。しかありといへども、韓文公なほ仏書を見聞せざるところあり。いはゆる「仏光非青黃赤白等」の道、いかにあるべしとか學しきたれる。「卿もし青黃赤白をみて仏光にあらずと參學するちからあらば、さらに仏光をみて青黃赤白とすることなかれ。」憲宗皇帝もし仏祖ならんには、かくのごとくの宣問ありぬべし。（一・二八八頁）



〔七四〕(174) 世尊七仏儀式

世尊<sup>①</sup>一日勅阿難<sup>②</sup>：「食時將至、汝当入城持鉢」。阿難<sup>③</sup>応諾。仏云：「汝既持鉢、須依過去七仏儀式」。阿難便問：「如何是過去七仏儀式？」。仏召阿難。阿難<sup>④</sup>応諾。仏云：「持鉢去」。

〔書き下し〕

世尊<sup>アルヒ</sup>一日、阿難ニ勅ス。「食時將ニ至リナムトス。汝当ニ入城持鉢スベシ」。阿難<sup>イッ</sup>応諾フ（<sup>インナ</sup>応諾ス）。仏云く、「汝既ニ持鉢セバ、須ク過去七仏ノ儀式ニ依ルベシ」。阿難便チ問フ、「如何是レ過去七仏ノ儀式」。仏、阿難ヲ召ス。阿難<sup>イッ</sup>応諾。仏云く、「持鉢スベシ」去（持鉢去）。

〔現代語訳〕

世尊がある日、阿難に命じた。「すぐ食時<sup>じきじ</sup>となる。お前は街へ乞食<sup>いつじき</sup>に行きなさい。」

阿難、「はい。」

仏、「乞食をするからには、必ずや過去七仏の作法に則らねばならぬ。」

そこで阿難は問うた。「過去七仏の作法とは、如何なるものでございましょう？」

仏は呼ぶ、「阿難よ。」

阿難、「はい。」

仏、「乞食に行きなさい。」

〔出典〕

(A) 『宗門統要集』卷一（二頁b）

(B) 『聯灯会要』卷一（続藏二三六・二二二頁a）

〔注〕

①世尊Ⅱ釈迦牟尼仏。一七〇則に既出。

②阿難Ⅱ釈迦牟尼仏の弟子。一六九則、一七〇則に既出。

③食時將至、汝当入城持鉢Ⅱもうすぐ食時であるので街に乞食に行けとの意。『仏本行集經』卷四一、「爾時<sup>そのとき</sup>、優婁頻螺迦葉、

彼の夜を過あしたとして後、晨に仏所に向かい、仏所に到り已りて而して仏に白して言さく、大徳沙門、食時將に至らんとす。飯食辦具せよ。(大正三・八四三頁c)。「食時」は夜明けから午時までの、食事を撰つてよい時間。「入城持鉢」は城内(市街)にて乞食すること。『仏般泥洹經』卷上、「仏、維耶梨国に還り、入城持鉢して分衛(乞食)を行す」(大正一・二六四頁c)。

④応諾ハハイと返事すること。その意味と「イラフ」の訓については、一六九則注⑤参照。

⑤汝既持鉢、須依過去七仏儀式ハ乞食する以上、必ずや古仏の威儀に拠らねばならぬ。「過去七仏」は釈迦牟尼仏とそれ以前に出現した毘婆尸仏、尸棄仏、毘舍浮仏、拘留孫仏、拘那含牟尼仏、迦葉仏。一〇二則注④参照。『宝慶記』にも次のように見える。「道元が疑うところは、我が仏世尊の世間に出現せらるるには、必ず古仏の儀式に依りたもう。所以に世尊、一日、阿難に告げたまわく、汝、七仏の儀式をもちいるべし」と。然れば則ち七仏の法は、乃ちこれ釈迦牟尼仏の法なり。釈迦牟尼仏の法は、乃ち七仏の法なり(七・三三頁)。「過去七仏の儀式」とは過去仏の間に連綿と伝えられた作法ということだが、そこには時空の規定を超えた普遍的な道という含意があるであらう。

⑥仏召阿難ハ「召」は大きな声で呼びかけること。一六九則注④参照。

⑦阿難応諾ハ名を呼ばれて即座に應えるはたらきに阿難の「本分事」が全現しており、それに自ら気づくことこそが「過去七仏の儀式に依る」ことに外ならない。一六九則注⑥参照。その他、一八五則、一九三則にも同趣旨の問答が見える。

⑧持鉢去ハ鉢を持って乞食に行け。「去」は「しに行く」の意。但し、底本は「去」を置字として扱っている。一〇八則注④参照。他に一二八則・一八九則にも見える。

### 〔七五〕(175)漸源在紙帳内

漸源一日、在紙帳内坐。有僧至撥開帳子云：「不審。」源以目視之、良久云：「会麼？」僧云：「不会。」源云：「七仏已前事、為甚麼不会？」

〔書き下し〕

漸源一日、紙帳ノ内ニ在テ坐ス。有ル僧至ル(僧有テ至テ)帳子ヲ撥開シテ云ク、「不審。」源目ヲ以テ之を視ル、良久シテ云ク、「会ス麼。」僧云く、「不会。」源云く、「七仏已前ノ事、甚麼ト為テカ会セ不ル。」

〈現代語訳〉

漸源がある日、紙の帳とまりの中で坐禅していた。

一人の僧がやってきて、その帳を開いて言う、「ご機嫌うるわしう。」

漸源は僧をじつと見つめ、そして、しばしの沈黙の後、言った。「分かるかな。」  
僧、「分かりませぬ。」

漸源、「仏法出現以前の事、それがなぜ分からぬのだ。」

〈出典〉

(A) 『宏智録』 卷三 (二〇八頁 a)

(B) 『宗門統要集』 卷七 (二五六頁 b)

『聯灯会要』 卷二〇 (続藏一三六・三八二頁 c)

『禪門拈頌集』 卷一四 (二四四頁 a)

〈注〉

① 漸源 〓 道吾円智の法嗣、漸源仲興 (生没未詳) のこと。『景德伝灯録』 卷一五等にその語を録す。『入矢義高先生追悼文集』  
「禅語録訳鈔注」に本則の訳注がある (汲古書院二〇〇〇年、一〇二頁)。

② 紙帳 〓 寝台に架けめぐらす、粗末な紙製の帳。藤の樹皮やまゆを原料とする (明・高濂『遵生八箋』 卷八)。次の例から推すに、  
主に僧の用いる物であり、質樸や清貧を象徵するものであったらしい。宋・蘇軾「自金山放船至焦山」詩、「老僧、山を下り  
て驚しき客至り、迎え笑い喜びて巴人の談 (四川語のおしゃべり) を作す。自ら言う、久しく客たりて郷井ふるさとを忘れ、只有弥勒ただの  
み同龕どうくわん為り。困眠ねむるりては、就くを得て紙帳暖かく、飽く食らえど未だ山蔬さんしょの甘きに厭かず」と (『蘇軾詩集』 中華書局三〇九頁)。  
宋・陸游『老学庵筆記』 卷三、「杜起莘、蜀より朝に入り、家を以て行わず。高廟、其の清修・独処を聞き、甚だ之れを愛す。  
一日、対うを得るに因りて褒論して曰く、「聞くならく、卿、局を出ては、即ち蒲団、紙帳のみにして、一の行脚の僧の如し  
と、真に及び難きなり。」起莘頓首して謝す」 (歴代史料筆記叢刊・中華書局、三五頁)。

③ 撥開帳子 〓 僧はトバリを押し開くことによって、漸源の真面目を覗おうとした。『聯灯会要』 卷二五・潭州龍牙山居通禪師

法嗣章に類似の例がある。「龍牙一日、紙帳の内に在て坐す。僧問う、是れ無身ならざるに、全露するを欲せず。請う師の全露せんことを。龍牙、帳子を撥開して云く、還た見ゆるや。云く、見えず。龍牙云く、眼を將ち來たらず(眼だまを忘れてまいったか)」(四二七頁b)。

④不審僧のあいさつの言葉。一〇六則注⑧参照。

⑤源以目視之、良久云「注視も良久(沈黙)も、言語以前のところを示唆する所作。」

⑥七仏已前事、為甚麼不会「先ほどの注視と良久は「七仏已前事」を直示したものだ。それを目の当たりにしながら、どうしてそこが看て取れぬ。七仏已前の事は、仏法の發生以前のこと。『正法眼蔵』「古仏心」巻、「まことに七仏以前に古仏心壁堅す、七仏以後に古仏心才生す、諸仏以前に古仏心花開す、諸仏以後に古仏心結果す、古仏心以前に古仏心脱落なり」(二・二〇六頁)。「聯灯会要」では、このあと、「後に僧、石霜に拳似す。霜云く、人の善く射るが如し、箭、虚しくは発せず」という記述が続く。

### 《補注》

『宗門統要集』はさらに東林常総の評を附す。

東林総云く、「漸源の「七仏已前の事」と云えるは且らく即從、石霜什麼を喚びてか「箭」と作す。」良久して云く、「漸源は頭白、石霜は頭黒。七仏已前、曾て漏泄す。既に漏泄せば、掩い得ず。南海の波斯、白沢を生む。」

※

※

### 担当者

六八—小早川

六九—林

七〇—池上

七一—小早川

七二—林

七三—池上

七四—小早川

七五—林